

山城盆地南部における明治期の商業的農業

乾 幸 次

はじめに

19世紀初頭、チューネンが彼の著書『孤立¹⁾国』において「都市が舟楫すべき河川によって貫かれている場合は、高等園芸栽培圏は河川に沿うて拡がってゆく」と述べたことはあまりにも有名である。

ところで、近郊農業地帯について、宮出秀雄²⁾は、都市への社会的・経済的関連性によって規定されるものであり、都市への輸送費が重要であると述べ、さらに昭和12年頃の京都の特定蔬菜経営地は、チューネン圏の如く幾何学的距離でなく、主要交通路に沿うて不正形に拡がっていると報告している。青鹿四郎³⁾は、都市よりの距離の遠近によって農業経営の集約度の差異・栽培作物の相違がみられるという。ところで筆者⁴⁾は、山城盆地南部の蔬菜栽培は、京都市よりの距離の遠近に関係なく、木津川流域の上流まで大した差異が認められないような栽培景観を呈し、チューネンの集約度の理論と不一致となって現われていると報告した。

さて、平安遷都以降山城国での蔬菜栽培は壬生菜・聖護院大根・堀川牛蒡⁵⁾・九条葱⁶⁾などの特定の産地名を冠した蔬菜名によってもうかがえるように、その経営地は平安京近郊に集中している。『雍州府志』にみえる山城盆地南部での特産蔬菜の産地をみると、蕪菁⁷⁾・蘿蔔(大根)が御牧⁸⁾に、芹菜⁹⁾が宇治に、牛蒡¹⁰⁾が八幡などの木津川下流付近に産し、さらに京都都心より約30~32kmの木津川上流の狛に茄子・越瓜・角豆¹¹⁾・生薑¹²⁾が、鐵司(錢司)に橘(ミカン)が産し、いずれも「賣京師」と記載されている。

山城盆地南部は歴史的大消費地、京都の郊村地域といえるが、ここでの商品農作物の経営

地は、単に京都市よりの距離の遠近によって機械的に決定されるものではない。本地域の商業的農業の究明には、歴史的背景と自然的条件の相違、京都・大阪への輸送費と輸送方法など、空間全体の質を問題にせねばならないと考える。

本稿は山城盆地南部の木津川流域における明治初期の商業的農業経営が、産業革命の進行とともにどのように変容していったかを考察したものである。

とくに、明治初期での木綿作・菜種作の衰退・消滅後、これにかわって栽培が増加していった各種の果樹・蔬菜類の発達を考察し、さらに、これらの商品作物相互間の競合関係などによって、商業的農業の変貌を解明し、併せて本地域の地域性を把握しようと試みた。

1 自然的条件と商品作物栽培の発達

山城盆地南部とは、山城盆地のなかでも南半の「南山城」と呼ばれるところである。行政的にみると、北は京都市域の南に接する宇治市・久御山町・八幡市域から、南は奈良県に接する木津町までをさすが、さらに木津川横谷と和東谷及び加茂・宇治田原での小盆地の諸町村も含まれる。

この南山城地方の平野を自然的・人文的諸条件からみて、南半の木津川河谷平野と北半の旧巨椋池沿岸の低湿地及び黄檗・宇治丘陵の3つに区分して考察する。

1 木津川の河谷平野

南半の河谷平野とは、盆地最南端の木津町から市辺・田辺両集落までの南北の距離約13km・東西幅約3kmの狭小で帯状を呈する木津川の氾濫原をさすが、豪雨期以外は比較的乾燥している。ために、農業用水は木津川堤に設けられた

用水伏越樋閘のほか、東西の山地から流れ出る小河川や溜池から用水を確保している。

この河谷平野では木津川に注ぐ20余の諸支流は天井川を形成し、本流に合するまでの比高2～5mに達している。

ところで、木津川が年々川床が高くなるにつれて、豪雨時には木津川堤に設けられた用水伏越樋閘よりの逆流と、天井川の漏水などによる悪水が湛水して、内水災害⁷⁾をひきおこすところである。

正徳4年(1714)市辺村の『乍恐以書付御願申上候』によると、4月の豪雨で悪水が湛水して麦15～16石減収したという。この悪水排水には、近世頃より各村々立会の木津川堤悪水抜伏越樋閘が設けられているが、木津川の川床が年々高くなるにつれて、湛水日数は1週間にも及ぶことが多い。日下雅義は降雨200ミリをこえると、天井川沿いの微高地・自然堤防・洪水堆積物などが島状に残るのみで、氾濫原の全域が水没すると述べている。

この河谷平野の微高地は、木津川右岸では新在家・上粕集落の西方から不動川下流に至る間に自然堤防が連なっている。これは条里以前の木津川の流路と考えられる⁹⁾。さらに下流へゆくと渋川の廃川敷がみられ、多賀集落西方の自然堤防は条里以前の旧流路とみなされる¹⁰⁾。天井川の氾濫によるものとしては不動川・玉川・青谷川・長谷川筋の北側に大量の砂州が堆積している。木津川左岸での砂州は、メアンダーの攻撃斜面などに分布し、僧坊・下粕集落の東方、滝ノ鼻・船集落、さらに下流へゆくと江津・山本・東集落の東方へと木津川堤に沿って堆積している。

これらの微高地の畑は、夏季の1～2週間の日照りでも干ばつによる減収が生じるので、上粕などでは灌漑用井戸を掘り、ミツルベ⁸⁾による灌漑や肥桶による灌水が行われている。だから明治初期の主な商品作物は、夏作の甘藷、冬作の菜種・エンドウ・ソラマメなどであって、木綿作はほとんど村内自給用に栽培されていて、大都市への出荷量は少ない。

他方、この河谷平野の東端は、鷲峰山西縁の断層崖で、樽松静江¹¹⁾によって井手断層崖と名づけられ、多賀・井手・棚倉・高麗にかけては急傾斜している。それに対し西端は、生駒山塊東縁に当り緩傾斜している。断層崖下には不規則な扇状地が多く分布している。ここでの最大の扇状地は玉川につくった井手扇状地で、ここでは玉川に井堰を設けて用水を確保して、聖武期(724～748)に橘諸兄によって早期に開発されて¹²⁾いる。

平野の東西の低丘陵地は、大阪層群からなる地層が分布し、真竹・孟宗竹が植えられている。さらに天井川の堤防傾面や木津川堤防外根敷の河川敷にも、堤防に沿って竹林が帯状に分布している。これらの竹林は、江戸期に山崩・土砂崩防止、堤防補強などの防災林として真竹が植えられ、明治後期以降に孟宗竹(筍藪)にかえられたものが多い。

井手・多賀の段丘面から山腹に分布するミカンの栽培は、明治・大正期に大阪・京都・奈良へ出荷され、京都府下最大の産地に発達した¹³⁾。

2 北部の低湿地

この低湿地は、巨椋池に合流していた宇治川・木津川など諸河川の沖積作用からなる後背湿地で、ほぼ15mの等高線にて囲まれる地域が遊水機能をはたして¹⁴⁾いて、山城盆地のなかではもっとも低い。ここでの小河川の古川は、枇杷庄付近より北へ直線状に流れて旧巨椋池に注いで¹⁵⁾いる。谷岡武雄は、この古川を『日本書紀』にみえる「粟隈の大溝」に当ると述べ、さらに古川は湖岸にデルターを形成している¹⁶⁾ので、条里以前の木津川は古川と直接連絡を保っていたかもしれないといっている。

さて、巨椋池湖岸は文禄期(1592～95)の秀吉による土木工事によって地形が大きく変遷した。巨椋池東岸の微高地は、宇治川の旧流路によって形成された自然堤防・中州と考えられる。南岸は木津川などによる花崗岩質の細かい砂の堆積による広い沖積平地で、数条の自然堤防・砂州・島状の畑が分布している。木津川左岸の東村・西村から北西方向へと帯状に延びる自然

堤防は、木津川の旧流路または分流跡であり、右岸での江ノ口から島田・東坊・坊之池・中島釘貫へと至る帯状の非条里地は、断片的ながら古い木津川の自然堤防である。左岸の岩田・下奈良の東方や右岸の佐山南方・寺田西方の広い砂州は、木津川の氾濫で流出したものである。

明治以前の木津川はこの地域を北上し淀北方で桂川に合流していたが、現在の木津川が実現したのは明治2年で、旧河道はいまも地形図にその跡を明瞭にとどめている。

以上の微高地は排水の良好な砂質土壌の肥沃な畑で、湿田からの伏流水により常に水分が保たれているので、夏季に日照りが続いても干害をうけることが少ない。だから、江戸期から明治初期にかけて木綿作のほか、甘藷・スイカ・長イモ・ゴボウなど夏作の商品農産物の産地となった。また梨果は木津川出水前に収穫できるので、天保年間(1830~43)に島畑に移植され、明治~大正期に栽培地を拡大した。佐山での砂州を利用したナス・キュウリ苗の促成栽培は、天正期(1573~91)にさかのぼるといふ。江戸期には大阪・京都へ販路をひろげ、明治期に促成栽培法を改良して今日の淀苗の特産地に発展した。

3 黄檗・宇治丘陵

宇治川谷口の北方での黄檗丘陵、その南方の宇治丘陵は大阪層群に属する。この地層は前者が黄檗層、後者は城陽礫層と呼ばれる。

黄檗丘陵は、醍醐山地西麓の黄檗断層崖麓に沿って西方に急傾斜しているが、麓はゆるやかになっている。丘陵の下方には段丘礫層がみられる。

宇治丘陵は、西方にゆるやかに傾斜し、地表には放射状に諸小谷が刻まれ、下方段丘下には久津川・大谷川・長谷川・青谷川などの諸河川が不規則な扇状地を形成している。

著名な青谷梅の栽培は、宇治丘陵西南端の下方段丘面の青谷川・長谷川の中流付近から段丘下の扇状地に及んでいる。近世に淀藩の奨励をうけて盛んとなり、弘化・嘉永(1844~53)の頃には、焼梅・烏梅(染料の原料)にして大阪

・京都の紅粉屋に販売²²⁾し、明治期以降は生梅・梅干にして大阪・京都への出荷が増加してゆき今日の特産地に発展した。寺田東方の丘陵下方段丘面を利用して、江戸末期より桃樹が、明治初期から李樹の栽培が盛んになった。

以上の如く山城盆地南部における商品作物栽培は、土壌・地形などの自然的条件と人文的諸条件をよく反映している。

とくに、微高地での畑作は、北半の低湿地に夏作物を中心とした商品作物、たとえば、綿花・スイカ・長イモ・ゴボウなどであるのに対し、南半の河谷平野では、冬作物の菜種・エンドウ・ソラマメなどとなっている。果樹は、北半の低湿地の島畑に梨、宇治丘陵に梅・桃・李が栽培され、南半の井手・多賀の東方の急傾斜面にミカンが卓越している。

このような栽培景観の相違は、この盆地の自然的条件の南北差が最大の要因である。

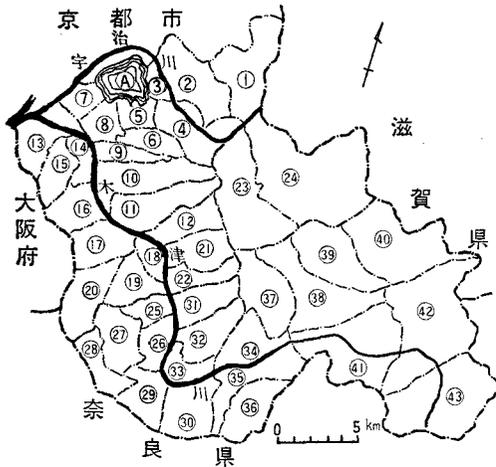
2 農業人口と農民社会

1 農業人口と人口増減

明治9年(1876)『山城国綴喜郡第四組井手村誌』には「農10=6(60%)商10=2(20%)雑業10=2(20%)」と記載されている。同年の『久世郡皇国地誌編輯=付調書』による農業人口は、寺田村80%、富野村87%、枇杷庄村89%で雑業の%も高い。

このように明治初期の農業人口は、現城陽市域が80~89%、現宇治市域が約80%、その他の久世・綴喜・相楽郡の諸村も約80~90%を示しているが、前述の井手村(現井手町大字井手)²³⁾の農業人口が約60%となっているのは、ここは江戸期から水車油稼業や大和街道筋の玉水宿駅での旅籠・問屋・街道稼人などの商業・交通に関する職種が多かったからである。

さて、明治中期頃まで南山城地方の諸村の人口は、年々ほぼ一定の水準、または微増している。さらに明治23年(1890)~大正9年(1920)の30年間の人口推移をみると、著しい増加を示すのは商工業の発展した宇治・東宇治・井手・上粕の4カ町村のみであって、微増加している



④巨椋池

①笠取村②宇治村③嶋島村④宇治町⑤小倉村⑥大久保村(以上現宇治市)⑦御牧村⑧佐山村(以上現久御山町)⑨久津川村⑩寺田村⑪富野荘村⑫青谷村(以上現城陽市)=[宇治・久世郡]⑬八幡町⑭都々城村⑮有智郷村(以上現八幡市)⑯大住村⑰田辺村⑱草内村⑲三山木村⑳普賢寺村(以上田辺町)㉑多賀村㉒井手村(以上現井手町)㉓田原村㉔宇治田原村(以上宇治田原町)=[綴喜郡]㉕狛田村㉖祝園村㉗植田村㉘山田荘村(以上現精華町)㉙相楽村㉚木津村(以上現木津町)㉛棚倉村㉜高麗村㉝上狛村(以上現山城町)㉞瓶原村㉟加茂村㊱當尾村(以上現加茂町)㊲西和東村㊳中和東村㊴東和東村㊵湯船村(以上現和東町)㊶笠置村(現笠置町)㊷大河原村㊸高山村(以上南山城村)=[相楽郡]

図1 地域概念図(明治23年12月現在の町村)

のは東部の山間の諸村に集中し、人口停滞地帯は木津川流域の水田の卓越している農村である。

石田龍次郎は、明治後期になると北陸・近畿・山陽の水田地帯での人口減少は著しいと述べているが、木津川流域の農村は、米作のほか果樹・蔬菜・茶などの集約的農業を行い、近郊農業を發展させていったので、大都市への人口流出などによる人口減少はほとんどみられない。大正中期以降は人口の微増加現象を示しているのである。

2 農民層の分解と商業的農業

山城盆地南部の農村での農民層の分解は、江戸期からみられ、過小農民が圧倒的多数をしめ

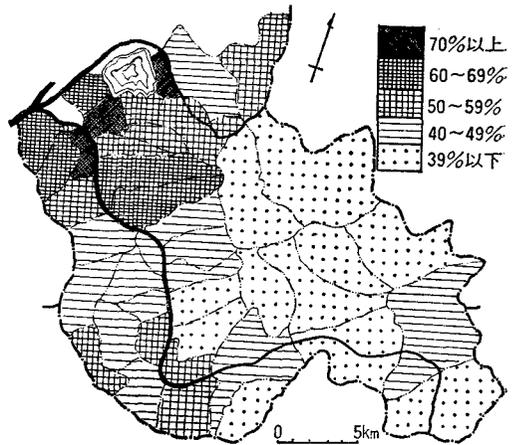


図2 昭和4年小作地率

(注)『京都府統計史料集(2)』86頁の資料により作成

ている。

元禄14年(1701)『上田氏旧記』によると寺田村では農家総数419戸のうち、無高百姓130戸(31%)、高持百姓289戸(69%)となっているが、高持百姓のうち5石以下が55%を占めていて、近世初頭ですでにこのような零細小農民の比重が高いことが知られる。²⁵⁾文政5年(1822)の『井手村明細帳』は「当村家数138軒、内94軒高持百姓(68%)、44軒水呑百姓(32%)」と記している。

これらの零細農民は、明治10年代の米価上昇とデフレ政策のなかで、小作農民や農作業を主とする雑業の賃労働者に没落し、土地は大地主へ集積されていった。明治29年(1896)富野荘村の『所得高200円以上アルモノ調査』によると、在村耕作地主26人のうち、20町以上の耕地所有地主1人、10町以上2人、5町以上10人、2町以上13人となっていて、資本力の豊かな地元の地主が耕地を買い集めていることがわかる。これらの地主は、雇用人を使用して約1町歩を自耕しているのみで、大部分の耕地は小作人に耕作させている。²⁷⁾大正9年(1920)京都府市郡別小作地率をみると、60~70%内外の高率を示すのは、現京都市域・乙訓・南桑田両郡のほか、山城盆地南部では、京都市域に南接する久世・

綴喜の2郡になっていて、木津川中・下流及び巨椋池南岸の低湿地帯に集中している。昭和4年における市町村別小作地率も大正期とほとんど変化していない。

この高率小作地での小作料はきわめて高額である。明治18年(1885)富野荘村外3カ村の『小作慣行調査項目』によると「米小作尅反歩ニ付小作米尅石参斗ニシテ地主小作人所得折半ノ割合地主六分小作人四分。米小作豊凶共増減ナント雖モ天災ノ為メ潰地或ハ旱水害ノ節ハ其損害ニ応シ減額ス」などと記録されている。明治43年(1910)富野荘村の『田地耕作利益表』によると、1反当の小作料は1石5斗となっているが、耕作の諸経費を差引くと1反当りの収益は、地主が11円24銭であるが小作人は僅か3円80銭となっている。

表1 農・工諸雇賃銭表……明治21年富野荘村

業名	賃銭	上	中	下
農作業年雇	(男) 1ヶ月給料	円 銭 2・50	円 銭 1・70	円 銭 1・20
	(女)	1・20	1・00	50
農作業日雇	(男) 1日賃銭	15	12	70
	(女)	8	6	40
養 蚕	(男)	20	15	10
	(女)	15	12	8
糸 (蚕糸女)	(男)	/	/	/
	(女)	15	12	8
製 茶	(男)	27	20	15
	(女)	/	/	/

(注) 明治19~22年『富野荘村農商務通信ニ係ル書類』による。

この高率小作料に苦しむ小作農民は、小規模ながら商品作物栽培に専念しながら、地元の地主と日雇・年雇の契約で茶・果樹・米作などの農作業に従事している。明治22年の富野荘村の調査によると、1カ年間に雇人を使用した自作農は62戸にも及んでいる。

以上のように巨椋池南岸や木津川中・下流地

域での農村は、高率小作料・高率小作地が明治・大正・昭和初期まで維持されている。このことは、零細な農民が農業に依存せねばならない状況を示していると考えられる。いいかえると、農業労働力が大阪・京都の大都市に吸引されおらず、潜在的過剰人口の状態がつづいていたといえよう。

3 交通の発達と商業的農業

1 街道・河川交通と都市への輸送費

山城盆地南部は、古代より河内・大和とも結びつき、2つの古都をつなぐ廊下地帯をなしていた。王城の地が大和から山城に遷っても、この地理的性格は基本的に変わることなく現在までもちつづけている。

さて、木津川右岸の大和街道には、江戸期に伏見・長池・玉水・木津に宿駅が設置されている。明治10年大和街道の拡張工事を行い、従来からの2間の道幅を車両の通行可能な4間に広げた。明治22年(1889)長池駅の戸数170戸、陸運営業者50人、同稼業者50人、車両23両、人力車21両となっていて、伏見までの貨物輸送費は、人足(担い)5銭、荷車15銭、人力車15銭で発荷の主なもの甘藷・梨・桃・梅などの特産農産物であった。

鉄道の開通は早い。明治29年(1896)京都一奈良間(奈良鉄道株式会社・現国鉄奈良線)、同31年長尾一木津間(現片町線)、名古屋一木津一大阪間(現関西線)が全通した。奈良鉄道が開通した明治29年に玉水停車場前に「玉水倉庫合資会社」が創立され、鉄道の発着荷物を取扱っている。奈良鉄道による発荷物は、果実・甘藷・茶・筍などの農産物で、着荷物は油粕・魚肥・木炭・塩などであった。この鉄道輸送は木津川水運が衰退するにつれて増加している。

さて、山城盆地南部を南北に貫流する木津川は、江戸期になるとおもに淀船が、いわゆる7浦(淀・一口・吐師・木津・瓶原・加茂・笠置)を根拠地にして就航し、川岸には浜が設けられた。前述の文政5年の『井手村明細帳』には「御年貢米津出し 是者二条御蔵場津差出し候

表2 明治25年 富野荘村より大阪・京都・伏見への輸送費

	大 阪		京 都		伏 見	
	船 便	錢 厘 10. 0	陸 便	錢 厘 15. 0	陸 便	錢 厘 10. 0
穀物 1石ニ付						
果実 1貫ニ付	同	0. 5	同	1. 0	同	0. 8
薪 ”	同	0. 2	同	1. 4	同	0. 2. 5
茶 ”	同	1. 0	同	1. 0	同	0. 8

(注) ・明治25年『富野荘村郡役所庶務係往復綴』による

・富野荘村(現城陽市)は京都府庁より6里52間余(約25km)南に位置している。

節者木津川へ附出し淀舟=積鳥羽伏見迄附届ケ鳥羽伏見問屋より車ニ而京着=御座候」と記されている。明治2年(1869)加茂浜には上荷船18艘・柴船6艘, 瓶原浜には上荷船18艘・柴船10艘があり, 浜出し荷物は, 甘藷・里芋・柿・信楽瀬戸物・炭・茶などである。

市場への輸送費についてみると, 陸路による京都市場よりも, 水路による大阪市場への輸送費がきわめて低廉である(表2)。だから山城盆地南部の木津川中・上流地でも, 大阪市場への出荷を目標に果樹・果菜・甘藷・茶などの商品作物栽培が早くから盛んになったわけである。大阪天満市場の明治27年の青物の入荷状況³⁵⁾をみると, 山城地方(18.9%)からかなりの入荷量があり, 大阪府内での和泉地方(15.8%)・河内地方(7.4%)よりもその量が多くなっていることが注目される。

以上により山城盆地南部は, 木津川・淀川水運を通じて, 明治期にはすでに大阪の都市勢力圏に包含されており, 大阪への蔬菜供給圏内に属していたのである。このように京都・大阪両大都市へ出荷し得る有利な条件が, この地方に早くから商業的農業を発達させた最大の要因である。

2 近郊農業経営と都市尿尿供給圏

近郊農業地帯では, 尿尿が速効性窒素質肥料として大量に施用されていたので, 大都市よりの尿尿供給圏は, 近郊蔬菜栽培地帯とほぼ一致していた。それは, 尿尿の成分からみた価格は, 大豆粕の約 $\frac{1}{6}$ の市価³⁶⁾であって, 他の諸肥料の価格と比べてはなはだしく安い肥料であったから

である。

尿尿は重量が大であるうえ悪臭・汚れ・衛生上などの諸問題から長距離運送は困難であって, その輸送範囲は荷車・牛車による陸路の場合, 一日の往復圏内の片道約15kmとなるが, 水路での尿尿船(肥船)による運送は, 遠距離輸送が可能になるので, 戦前東京市から搬出される尿尿の30~40%は, 水路輸送により埼玉県へ供給³⁷⁾されていた。

さて, 山城盆地南部の木津川流域の場合は, 京都市心より約30~35km上流の遠距離まで水路輸送による京都市の尿尿供給圏になっていた。

伏見の尿問屋(肥商人)から購入された尿尿は, 肥船によって木津川・宇治川の各浜に陸揚げされ, 果樹・茶畑や菜種・麦作の寒肥として, また綿・蔬菜作の元肥・追肥にも大量に施用された。弘化2年(1845)伊勢田の農家は65.5荷(1荷とは肥桶2個)の尿尿を, 1荷につき銀1匁3分で購入している³⁸⁾ので, 当時の米一石の値段に相当している。明治43年(1910)市辺村の尿尿購入の『契約証書』には「上等下尿一荷ニツキ代金35銭。空田子桶(空肥桶)到着セバ一荷ニツキ金老銭ヲ運夫ニ支申候事」とある。同年の寺田村肥料消費金額をみると, 菜種油粕(45.3%)や大豆油粕(3.5%)などの諸肥料よりも, 人糞尿(49%)の消費高がきわめて多くなっているのが注目される(表3)。

ところで, 大正・昭和期になると, 菜種油粕・大豆油粕・魚肥・化学肥料などの購入肥料が次第に増加してゆくが, 尿尿の価格は明治末期より下落³⁹⁾している³⁹⁾ので, 尿尿の施用はあまり減

少していない。昭和12年宮出秀雄⁴⁰⁾の調査によると、京都市の尿尿供給圏は、京都市域・乙訓郡のほか、木津川・宇治川流域の久世・宇治・綴喜の諸郡に集中している。木津川水運が消滅していた戦前から戦後にかけて、荷車・リヤカー・肥トラックや肥（尿尿）専用貨物電車（奈良電鉄・現近鉄）による輸送もみられたが、これは一時的な現象であった。

4 商品農作物とその作物間の競合

1 商品農作物の種類

明治6年（1873）『松井村（現田辺町）産物高調帳』により村外へ出荷された農産物をみると、米（生産高の39.1%）、菜種（100%）、茶（73%）、筍（62.5%）、実綿・ミカン・甘藷（各60%）などで、総生産金額5,156円のうち2,398円（46.5%）にも達している。

明治14年『京都府地誌』⁴¹⁾の各藩政村の「物産」の項にみえる輸出（大阪・京都などへの出荷）農産物をみると、北半の低湿地では、綿花・スイカ・長イモが、南半の河谷平野では菜種・エンドウ・ソラマメ・ゴボウの出荷がとくに多い。このほか、ナスは五ヶ庄など宇治川流域に、蘿蔔（大根）は里・南稲八間村など木津川上流に、

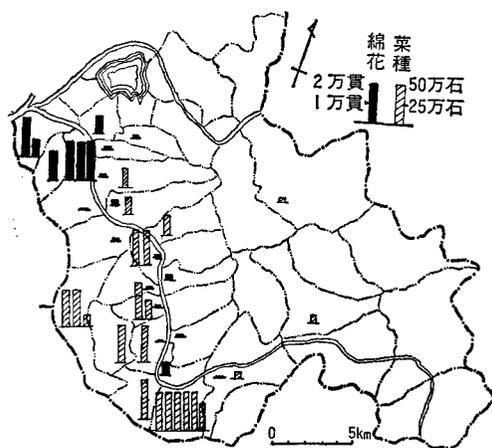


図3 明治14年 綿花・菜種の出荷量
(注)明治14年『京都府地誌』により作成

表3 明治43年 寺田村肥料消費高

	消費高	金額と%	10貫の金額
菜種油粕	600,000	12,600(45.3)	2.10
大豆油粕	4,900	980(3.5)	2.00
青草	30,000	450(1.6)	0.15
人糞	400,000	12,000(43.2)	0.30
人尿	320,000	1,600(5.8)	0.05
わら灰	6,000	150(0.5)	0.25
合計	1,360,900	27,780(100.0)	

(注)・明治43年『寺田村現勢調査簿』の資料により作成

・寺田村は現城陽市

甘藷はほぼ全域の村々から出荷されている。果樹はまだ出荷量が少ないが、梨は北半の島畑に、ミカンは井手や銭司付近の南西の傾斜面を利用して栽培している。これらの果樹・蔬菜類は、明治中期以降栽培面積が増加してゆき主要な商品農作物となった。

これに対して、明治中期以降出荷量が次第に減少して商品作物の地位を失ったのは、苧蓆玉・百合根・生薑・胡麻・煙草・大豆・小豆などがあり、これらは南半の河谷平野と木津川横谷

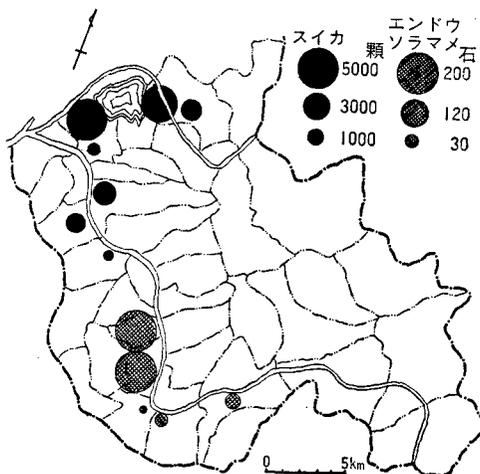


図4 明治14年 スイカ・エンドウ・ソラマメの出荷量
(注)明治14年『京都府地誌』により作成

や和東谷の村々から出荷していた。

以上のように明治初期において、京都都心より約35kmの木津川上流まで商品作物が栽培され、大阪・京都へ出荷されているのは、木津川水運によることが大である。また、北半の低湿地は夏作物の綿花・果菜類が、南半の河谷平野は冬作物の菜種・豆類がおもな商品作物であったのは、前述したようにこの盆地の自然的条件の南北差によるものである。

2 木綿作とその衰退・消滅

綿花は開花期以降は降雨をきらう作物で、綿作畑は栽培期間中土壌に十分な水分が保たなければならない。また油粕・干鰯・人糞尿など多量の肥料と労力を必要とする。

宝暦4年(1754)『中村明細帳』や天保14年(1843)『市辺村明細帳』には「木綿作、田方ニハ無御座候」と記されていて、山城盆地南部⁴²⁾での綿作は、大和・河内などでの「田方綿作」はみられない。山城盆地南部での木綿作は、前述のようにおもに北半の低湿地の旧木津川の自然堤防や島畑⁴³⁾の砂壤土の肥沃な畑地で栽培され、「山城綿」として大阪などへ出荷している。

明治20年(1887)大住村の販売農産物は、米(12,900円)、綿花(3,000円)、茶(880円)などであって、綿花は商品化の高い作物である。明治33年草内村の農家(自小作農家・田1.2町畑1.4町を耕作)の『経済調査』によると、綿花の栽培面積は畑1.8反、生産量75貫にすぎないが、生産量の84%を大阪へ出荷している。

山城盆地南部における綿花栽培は、明治20年(1887)頃を頂点として、同25年頃より衰退の段階に入り、明治35年頃より急速に減少してゆき明治40年以降は消滅している。具体的にみると、八幡・都々城両村での明治27年の生産量は、明治14年の約 $\frac{1}{2}$ に減少している。綴喜郡内の明治37年の生産量は、10年前の僅か $\frac{1}{3}$ にすぎない。久津川村での綿作反別は、明治35年に2.5町、36年に1.5町と減少し、それ以降は毎年前年の $\frac{1}{2}$ 以下に減少してゆき、明治40年(1907)には消滅している。

以上のように山城盆地南部における「山城

綿」の消滅の速さは、主要綿作地であった大阪・愛知⁴⁴⁾などとよく似ている。消滅した綿作畑は、梨畑のほかナス・スイカ・早生甘藷などの栽培地に転換された。

3 甘藷と蔬菜との輪作

山城盆地南部の特産農産物となった甘藷は、享保元～2年(1716～17)頃に鹿背山(現木津町)・長池(現城陽市)で栽培がはじめられた⁴⁵⁾と伝えられている。

甘藷は砂壤質土の瘦地の畑で、少量の加里肥料のみで栽培できる作物である。木津川流域の砂州で収穫した甘藷は、とくに品質優れ商品価値が高いので、山城盆地南部の全域に栽培地を拡大し、明治初期の主要な商品作物となった。とくに明治14～15年頃に讃岐より導入した早生種は、4月に定植し7～8月に収穫できる促成栽培である。8月に収穫した早生の甘藷畑の後作には、大根・蕪^{かぶら}(8月→11月)・エンドウ・ソラマメ・冬野菜(11月→翌5月)を栽培する3毛作の輪作を行っている。

また、労力の配分からみても甘藷は有利な作物である。4月の定植後1回の除草のみで収穫できるので、栽培期間中は茶摘・製茶、果樹の手入・収穫、田植・水田の草取りなどに労力を配分し、農閑期に入った8月に早生甘藷が、普通作の甘藷も10月に収穫できる。

前述の明治14年『京都府地誌』によると「久世郡=寺田・富野・久世ノ三村(現城陽市)ヨリ出ル者特ニ甘旨観音堂・大久保・枇杷庄・上津屋・下津屋・田井・中村ノ諸村之ニ次グ。全部一ヶ年ノ出高凡拾五万貫。京阪・伏見及近傍ニ販売ス」(・印は筆者)「綴喜郡=岩田村・川口村ニ産スル者佳ナリ……全郡凡二拾万貫目。相楽郡=北村・祝園村・吐師村・相楽村等ニ産スル者全郡ニ冠タリ。全郡一年間産出高凡六万五千貫目」とある。大正期になると、京都府総生産高の60～65%をしめるようになった。とくに寺田村での生産高は、明治14年2.4万貫、同43年15万貫、大正7年には26.9万貫と急激に増加してゆき、「寺田いも」と呼ばれる特産物になった。

表4 農作業の労力配分……明治45年久津川村

月 別	農 作 業	1 日 の 労働時間
1月	上旬 麦・茶・桑・果樹の肥培と果樹の剪枝	8
	中旬 ”	8
	下旬 ”	8
2月	上旬 麦の耕耘と施肥	8
	中旬 ”	8
	下旬 ” 及薪刈	8
3月	上旬 麦の耕耘と施肥	10
	中旬 果樹の移植	10
	下旬 桑・茶畑の中耕	10
4月	上旬 梨・桃・茶・桑の施肥	10
	中旬 水田の耕耘と蔬菜・稲種子の播種	10
	下旬 甘藷の定植と製茶の準備	10
5月	上旬 稲田の耕耘と蚕飼育	10
	中旬 製茶	12
	下旬 ”	12
6月	上旬 夏野菜の手入と麦の収穫	11
	中旬 田植	11
	下旬 製茶（二番茶）	11
7月	上旬 ”	11
	中旬 夏野菜の手入と稲田除草及夏蚕飼育	10
	下旬 ” ”	10
8月	上旬 夏野菜の除草・施肥・中耕と甘藷の早掘り	10
	中旬 ” ”	10
	下旬 ” ” 及梨果収穫	10
9月	上旬 梨果収穫	10
	中旬 夏野菜の手入・施肥	9
	下旬 茶畑の中耕	9
10月	上旬 甘藷・夏野菜の収穫	9
	中旬 ” ”	9
	下旬 麦の播種と水稻の収穫	9
11月	上旬 水稻の収穫	8
	中旬 ”	8
	下旬 ”	8
12月	上旬 ”	8
	中旬 果樹苗の植付	8
	下旬 果樹・茶・桑の中耕と施肥	8

(注)・明治45年『久津川村統計調査』により作成。

- ・5月中・下旬の12時間の労働時間は、午前3時～12時と午後1時～8時まで、休憩時間は午前・午後各2時間。
- ・久津川村（現城陽市）は木津川下流の低湿地の農村。

さて、宮出秀雄⁴⁶⁾は、近郊農業においては粗放的な作物、たとえば甘藷・牛蒡^{ごぼう}・生大根などは漸次衰退し、集約的作物のナス・キュウリ・ネギなどの果菜・葉菜類の作付面積が増加すると述べているが、山城盆地南部における甘藷栽培は、明治～大正期にかけて果樹や蔬菜類とともに作付面積が増加している。

これは甘藷を商品作物として栽培してきたこと。早生種による促成栽培によって秋・冬野菜との輪作型の集約的経営を行ったこと。さらに甘藷の栽培期間中は夏野菜・果樹などの栽培に労力が投入できること。木津川・淀川の船便により低廉な輸送費で大阪への出荷が可能であったことなどによる。

4 後背湿地の水田へ拡散した梨樹栽培

日本における果樹栽培のための土地利用は、傾斜面がおもに利用されていて水田地帯に入った事例は少ないが、山城盆地南部の場合⁴⁷⁾は、木津川の出水前に収穫できる作物として、文政12年(1829)に美濃の国から導入して島畑に植えた⁴⁸⁾のにはじまる。

梨果は商品化率がほぼ100%で、船便を利用して大阪へ出荷し得る商品作物であるので、綿作が衰退・消滅した明治35～45年頃から木綿作畑が急速に梨畑に転換した。さらに明治末期から大正前期にかけて、寺田集落西方の内水災害常襲地の後背湿地の水田地帯へと拡散されたのが注目される。

梨畑に転換される水田は、生産力の劣った湛水田・湿田や砂が流入する水田で、これらの水田の一部分を高畝による細長い島状の梨畑に改良している。この水田の梨畑化は、自作地になされた場合が多い。これらの地主は、稲作と梨樹栽培とを農業経営の中にとり入れており、果樹専業農家はみられない。

また小作水田にもみられるのは、地主が小作料の安定した収納を計ったためと考えられる。

山城盆地南部での日本梨の生産量は、明治末期を頂点として次第に衰退してゆく。主産地に発展した寺田・富野庄2村の大正7年の生産高は、明治43年の約⁴⁹⁾半に減少している。しかし、

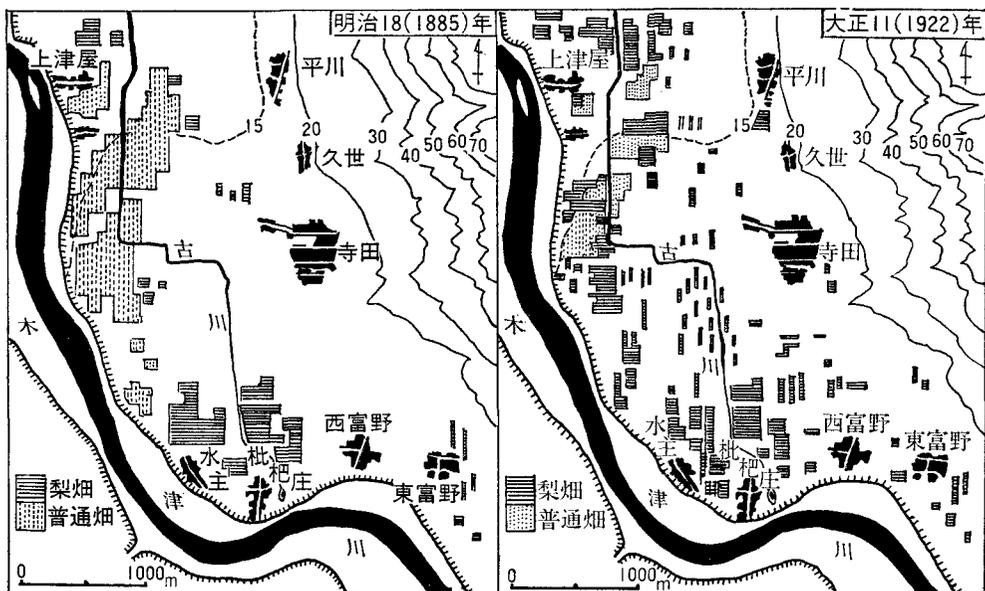


図5 島畑から水田のなかへ拡散した梨畑

(注) 大日本帝國陸地測量部及び地理調査所発行の地形図により作成

大正期の久世・綴喜両郡の生産高は、京都府下総生産量の60~70%を占めていて、特産地の地位は保たれているが、衰退の速度が早くなったのは昭和期以降で、現在は川口（現八幡市）佐山（現久御山町）の島畑に梨畑がみられるのみで、それ以外はほとんど消滅した。

このように江戸末期から明治期にかけて栽培面積が増加し、大正期以降漸減がつづいているのは、ここでの梨果は他産地との競争に打ち勝ち得なかったことにもよるが、洪水前に収穫できる作物として導入された梨樹は、大正期以降の木津川治水事業により、洪水などの災害の回数が少なくなったので、水田への再転換や島畑での梨樹栽培よりも一層有利なナス・キウリ・マクワウリ・スイカや甘藷の促成栽培に再度転換されたためである。

5 桃樹と李樹（寺田李）の競合

桃樹と李樹は、ともに排水の良い砂質土に適するので、宇治丘陵西方の開析谷や不規則な扇状地に栽培され、施肥・栽培方法・収穫期などもほとんど同じである。

さて、桃樹栽培は江戸末期から盛んとなった。明治20年（1887）寺田村で桃果140荷、李65荷、久世村は桃果500斤、明治24年富野荘村では桃果36,800貫（2,944円）梨果28,700貫（2,580円）梅2,700貫（1,350円）の生産量を示し、明治中期での桃果の生産量とその金額は、数多くの果実のなかで首位を占めている⁵¹⁾。

他方、明治初期に導入された李は、宇治丘陵で桃樹と混植して栽培がはじまった。明治18年（1885）外国人への接待用の果物として神戸の外国商館への販売に成功し、明治36年（1903）大阪に開かれた内国勸業博覧会に李と桃・梨・梅を出品した。このとき寺田村に産する李は、他産地のものよりきわめて良質であったので有名となり、明治38年寺田村に産する李を「寺田李⁵²⁾」と改称した。同年寺田村の李果の生産量は15,000貫（28,000円）で、金額にして桃実の約2倍となり、米につぐ農産物となった。

このように急激に発達した寺田李に明治42年（1909）日焼病と呼ぶ病害が発生して品質が極

度に低下し、その防除方法が見出せなかったの
で、大正期以降は再度桃樹に転換され、昭和前期には李栽培は消滅した。

以上のように桃樹と李樹の栽培は経済的競合がみられた。桃樹は一時的に李樹に優位の地位を奪われたが、大正期に再び栽培が盛んとなった。しかし、この桃樹の栽培も昭和期以降は次第に衰退している。

6 ミカン栽培とその衰退

『雍州府志』に「橋 京師所賣多出自木津河邊鐵司々々地在山腹背北向南故一切柑類⁵³⁾至米殼其味爲宜是因土地和暖者乎 按鐵司地古錢司之領地乎」と記載されている。この錢司は木津川横谷の北岸の地で、この錢司から瓶原にかけて嘉永年間（1848~53）に温州・紀州品種を導入して、南傾斜面の山腹を開拓して栽培地を拡大している。品質も優れ「石寺柑子に錢司蜜柑⁵⁴⁾」と称して荷車で大和へ、木津川の船便で伏見・京都へ出荷している。前述の明治14年『京都府地誌（山城国相楽郡誌）』には「錢司村ニ生スル者ヲ以テ第一トス。石寺村之ニ次グ。例幣・釜塚村等又之ニ次グ。全部産出凡900貫目」とあり、生産量はあまり多くない。

井手・多賀を中心とするミカンの栽培は、奈良期に橘諸兄が井手に別業を設けたさいにはじまったと伝えられているが、宝永年間（1704~08）に温州苗を導入して、段丘面から南西傾斜面の山腹・山頂付近まで栽培地を拡大していった。前述の明治14年『山城国綴喜郡村誌（京都府地誌）』には「井手村ノ蜜柑凡六万四千四百七十貫目京都伏見及大和地方へ運送ス」とあり、さらに同書はこの井手村から2~3kmの近傍の諸村、すなわち多賀村（出荷量8,000貫）、中村（720貫）、飯岡村（250駄=1駄36貫トス）、東村（20駄）、興戸村（600貫）もミカンの出荷量の多いことを記載している。このように井手・多賀を中心とする地帯が、明治初期にはすでにミカンの生産地を形成していたことがわかる。

この地のミカンは、紀州のもの⁵⁵⁾と違って貯蔵によって甘味を増す「貯蔵ミカン⁵⁶⁾」である。収穫後各農家で貯蔵され、翌春の3月~5月に出

荷するので商品価値がきわめて高くなり、明治・大正期には次第に生産量が増加していった。明治29年(1896)奈良鉄道(現国鉄奈良線)開通後は、鉄道輸送によって中部地方まで販路を拡大している。しかし、昭和期以降は他産地との競合に打ち勝つことができず、ミカンよりも収益の多い筍(孟宗竹林)の生産に転換されて次第に衰退し、現在は多賀・井手の山腹にミカン畑が残っているにすぎない。

まとめ

山城盆地南部は京都の郊村地域といえるが、産業革命期においても農業労働力が京都・大阪に吸引されることなく、高率小作地・高率小作料が昭和初期に至るまで維持されており、潜在的過剰人口の状態がつついてきた。このことが木津川流域に集約的な農業経営を発展させていった。

また市場への輸送費は、陸路による京都市場よりも、木津川・淀川の船便による大阪市場への輸送費が低廉であるので、明治中期にはすでに大阪市の蔬菜・果実の供給圏に包含されている。このように明治期に京都・大阪两大都市に出荷し得る有利な条件を具えるようになっており、これが山城盆地南部に早くから商業的農業を発達させたわけである。

さて、木津川流域の商品作物としての蔬菜・果樹は、その種類がきわめて多い。これらの栽培地は、京都市からの距離の遠近によって決定されるのではなく、この盆地の地形・土壌などの自然的条件の南北差をよく反映している。すなわち、北半の低湿地における微高地での木綿作畑は、綿作の消滅後に梨畑のほか夏作物の果菜類や促成栽培の甘藷畑に転換されていった。葉菜類が増加したのは大正期以降である。これに対し、比較的乾燥している南半の河谷平野では、夏作物よりも冬作の菜種・エンドウ・ソラマメや根菜類がおもな商品作物であった。そうして明治末期から秋・冬野菜が漸増している。

この盆地全域に栽培地が拡大されて南北差が認められないのは、南山城地方の特産農産物と

なった筍と甘藷とである。筍は明治後期から大正期に栽培地が増大した。甘藷は木津川の砂州を中心に栽培され、商品作物として明治・大正期に、大阪・京都への出荷量が増大したのが注目される。

果樹の栽培は、江戸末期から盛んとなり、明治後期には李・桃・梨・梅・ミカンなどが特産物の地位を築いたが、梅以外は昭和期以降に衰退または消滅している。

(京都府立城陽高等学校)

〔付記〕本論文を作成するにあたり、谷岡武雄教授に貴重な御指導・御助言をいただきました。ここに厚く御礼を申し上げる次第です。

〔注〕

- 1) チウネン著・近藤康男訳『孤立国』(第一部) 日本評論社, 1947, 323~325頁
- 2) 宮出秀雄『都市近郊農業論』実業之日本, 1950, 17頁及び185頁
- 3) 青鹿四郎『農業経済地理』叢文閣, 1935, 15~427頁
- 4) 乾 幸次「大都市郊外の蔬菜栽培と都市の自給圏の構造——山城盆地の場合——」人文地理, 2-4, 1950
乾 幸次「都市近郊の農業」(山口平四郎・河野通博・谷岡武雄編『農業と牧畜』柳原書店, 1950), 23~27頁
- 5) 『雍州府志卷6』(野間光辰編『新修京都叢書』10巻, 臨川書店), 1976, 439~457頁
- 6) 谷岡武雄『平野の開発』古今書院, 1964, 7頁
等高線22.5mの線で南半と北半に地域区分している。
- 7) 日下雅義「山城盆地南部における内水災害」地理学評論, 41-8, 1968
- 8) 前掲 7)
- 9) 前掲 6), 52頁
- 10) 前掲 6), 52頁
- 11) 樽松静江「鷲峰山山塊周縁の構造地形」地理学評論, 30-1, 1957
- 12) 乾 幸次「山城国泉河榊井渡瀬についての補考」歴史地理学会報, 99, 1978
- 13) 京都府編『京都府誌(上)』1915, 574~575頁
- 14) 前掲 6), 9頁
- 15) 前掲 6), 54~57頁

- 16) 吉田敬市「巨椋池湖岸変遷考」日本史研究, 7, 1948
- 17) 前掲 6), 53~54頁
- 18) 谷岡武雄「山城盆地南部低湿地における平野の発達」地理学評論, 23-11, 1950, 387頁
- 19) 杉本嘉美『京都蔬菜の来歴と栽培』育種と農芸社, 1948, 103~106頁
- 20) 水山高幸「宇治市の自然と人文-(1)自然的基礎」(藤岡謙二郎・林屋辰三郎編『宇治市史(1)』宇治市役所, 1973), 45~47頁
- 21) 前掲 6), 12頁
- 22) 乾 幸次「明治30・40年代の農業の発展と地主制-(2)農業の発達」(城陽市史編さん委員会編『城陽市史 2巻』城陽市役所, 1979), 513~514頁
- 23) 京都府編『京都府地誌』(京都府立総合資料館蔵), 1881. 各藩政村の「民業」の項により算出した概数である。
- 24) 石田龍次郎「日本産業革命期の地理的諸相」日本史研究, 7, 1948
- 25) 奥田修三「明治30・40年代の農業の発展と地主制-(1)地主制の形成・展開」(前掲22), 469~470頁
- 26) 明治27~30年『郡長への進達書類綴』富野荘村
- 27) 京都府立総合資料館編『京都府統計史料集(2)』京都府, 1970. 84頁の統計資料で算出した。
- 28) 前掲27), 85~86頁の統計資料で算出した。
- 29) 明治18年『郡役所勸業往復綴』富野荘村
- 30) 明治43年『往復綴』富野荘村
- 31) 明治22~23年『諸報告書類綴』富野荘村
- 32) 前掲31)
- 33) 谷岡武雄監修・乾 幸次『井手町のくらしの歴史』(井手町史 3集)井手町史編集委員会, 井手町役場, 1979, 212頁
- 34) 関 順也「近世における木津川舟運の一研究」経済論叢, 72-2, 1953
- 35) 青木伸好「都市の影響と空間の非連続—明治~昭和初期の大阪周辺地域を事例にして—」人文地理, 32-1, 1980, 12頁
- 36) 前掲 2), 61頁
- 37) 前掲 2), 70~72頁
- 38) 木村辰男・島田正彦・藤本利治「舟運と街道」(藤岡謙二郎・林屋辰三郎編『宇治市史(3)』宇治市役所, 1976), 210頁
- 39) 明治43年・昭和4年寺田村『現勢調査簿』の資料により算出した。
- 40) 前掲 2), 189頁
- 41) 前掲23)
- 42) 浮田典良「江戸時代の大和一村落における耕地と綿作一」地理学評論, 30-10, 1957
浮田典良「綿作と菜種作の関係について—近世大阪平野における—」人文地理, 14-5, 1962
岡村光展「近世後期の大和綿作に関する考察」地理学評論, 48-5, 1975
- 43) 京都府立総合資料館編『京都府百年の年表(3)』京都府, 1970, 91頁
- 44) 前掲24)
- 45) (前掲13), 579頁
(前掲22), 503頁
京都府教育会相楽郡部会編『京都府相楽郡誌』1920, 110頁
- 46) 前掲 2), 36~38頁
- 47) 安藤万寿夫「水田卓越地域における果樹栽培の展開」地理学評論, 28-9, 1955
- 48) 京都府教育会綴喜郡部会編『山城綴喜郡誌』1908, 132頁
- 49) 前掲39)の資料で算出した。
- 50) 前掲27)130頁の統計資料で算出した。
- 51) 前掲26)と31)の統計資料による。
- 52) 前掲22), 505~507頁
- 53) 前掲 5), 『雍州府志巻 6』, 443頁
- 54) 前掲45)の『京都府相楽郡誌』114頁
- 55) 前掲48), 132頁
- 56) 前掲33), 96~97頁

COMMERCIAL AGRICULTURE IN THE SOUTHERN PART OF YAMASHIRO BASIN, CENTRAL JAPAN, IN THE MEIJI ERA

Koji INUI

The southern part of Yamashiro basin, through which the Kizu river runs from south to north, locates at the southern outskirts of Kyoto City. In this area, growing of vegetables and fruits for marketing developed early in the Meiji Era. The products were shipped to Osaka and Kyoto City through the Kizu and the Yodo river.

The distribution of the growing lands of these crops in this area did not depend on the distance from the consuming districts, but reflected natural conditions such as land form and soil which were quite varied within this area. The cotton fields located at a little raised strips in low and damp lands of the northern part of this area were converted into the fields of pear, fruit vegetables of summer, and sweet potato. On the other hand, the main crops for marketing at the valley of the southern part were rape, pea, broad bean, and rootcrops. Except the last ones, they were cultivated as winter crops. It is after the Taisho Era that the production of edible herbs increased. Apart from ume or Japanese apricot, the cultivation of many kinds of fruits flourished from the latter half of the Meiji Era to the middle of the Taisho Era, but it fell away or disappeared in the Showa Era.